

神小だより

2025年が始まりました

第11号

神山の雪景色



「1年が過ぎるのってほんとに早いですよね。本年もよろしくお祈りします。」と、年始に近所の人と交わした会話。改めて考えてみると、これって小学生の間で交わされている会話ではない…若者の間でもなかなか聞かれない会話で…、中高年の間で度々交わされる会話のように思います。ご多分に漏れず、私も50歳を過ぎたあたりから「あっという間」等、時の流れの早さをよく口にするようになりました。フランスの哲学者が発案したジャンネの法則によると、50歳の人にとっての10年間は、5歳の子供の1年に当たり、5歳の子供の1日は、50歳の人10日に当たるそうです。だとするならば、人は年齢を重ねる毎に、限りある時間に対して、真摯に向き合って有効に使っていかねばなりません。

1年の中で、最も短い3学期。早くも20日が経ちました。1日1日を大切にして、教職員一同、本年もより一層神小教育の発展・充実に向けて歩いていく所存です。どうか本年もよろしくお祈りいたします。

さて、1月8日(月)から3学期が始まりましたが、あいにくの天候で、2時間遅らせての始業となりました。翌9日に始業式を行い、子供たちも新しい年を迎えて、晴れやかな表情でした。終業式の時以上に、底冷えした体育館ではありましたが、どんな状況でも厳粛な雰囲気です。式典ができる子供たちに、いつも感心しています。

始業式では「当たり前なことを当たり前にする」「挑戦をする」「読書をする」の2学期の目標に加え、夢や志を実現できる人になってほしいという願いをこめて、「積極的に自分の考えや意見を伝える(思いや願いを伝える)」を3学期の目標とし、それについて話をしました。夢や志を実現するためには、子供たちが安心して自身の思いや願いが語れる集団でなければなりません。『叶』の字ごとく、1日10回以上発表できる、また人の発表を聴き認めるとができるようになってほしいです。



学力等の生きる力を高める『思えば半分』



校舎内を巡回していると、それぞれの学年の掲示板等に「書」で表現した作品があり、歩きながらそれらに目を奪われます。

1年生は、学習のビフォーアフターがよく分かる硬筆の作品。学習を通して、成長したことが手に取るように分かります。

5・6年生教室前廊下には、天井から吊り下げられた毛筆の作品があります。さすが高学年になると、見応えのある作品ばかりです。思いのままに書きたい言葉を選んで力強く書かれた書には、子供たち一人一人の思いや考えが詰め込まれています。言葉で伝えるだけでなく、これも大切な表現の仕方であると実感しました。

昔から字を書くことは勉強の基本でした。「読み、書き、そろばん」といって、字をきれいに書けるようになること、本をしっかりと読めるようになること、計算がしっかりとできるようになることも勉強の基本でした。江戸時代には、今の学校の基となる『寺子屋』がありました。今のような鉛筆やボールペンがない時代です。子供たちは、墨をすって筆で字を書くことが当たり前でした。字を上手に書けるようになることは、子供たちの大きな願いでした。それで、

一年の初めに、今年も字が上手に書けるようになりたいという願いを込めて「書き初め」をしたとのことです。「書き初め」は、文化として受け継がれ、現在も多くの学校で取り組んでいます。

この時代を代表する書道家「佐々木志頭磨」の修行(学習)の一場面を紹介します。他の子供と同様、字が上手に書けるようになることが志頭磨の願いで、それを目標にしていました。庭を竹ぼうきで掃いているときも、白い砂に字を書いているのは消し、消しては書くことが、楽しみの一つとなっていたそうです。また、あるときは、午前3時にたたき起こされ、「漢字一字を100回書く」ことを命じられ、邪念を振り払い無心で一生懸命に書いたとのことです。自分の興味関心と、苦しく辛い猛練習に耐えた結果、佐々木志頭磨は、江戸時代で最も有名な書道家になりました。

『思えば半分』という言葉があります。夢や志を実現したいと本気で思うことは、「半分は実現できるようになった」「そうした力が付いてきた」ということです。本気で実現したいと思えば、意識が変わり、やらなければならないことが見えてきます。そして、そのことが行動につながっていきます。子供の思いや願いが安心して語れる場所をつくり、そして、そのことを真剣に受け止め、全力で応援する大人でありたいものです。

本校教育活動や学習の様子をご覧ください。



【神領小学校HP】